ひそかに読まれている本

『フューチャー・イズ・ワイルド』
ドゥーガル・ディクソン&ジョン・アダムス
松井孝典監修　土屋晶子訳
（ダイヤモンド社　2400円+税）
Tel.03-5778-7240

2億年後の地球はもっとワイルドになっている

平尾隆弘（編集者）

本書を読むとなぜかワクワクしてくる。

「驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界」と副題にあるように，『フューチャー・イズ・ワイルド』には，500万年後，1億年後，そして2億年後の地球が描かれている。豊富なカラー図版で，奇妙奇天烈な生物が次々に登場するのである。

著者の1人ドゥーガル・ディクソンは，20年以上前(1982年5月)，『アフターマン』(旺文社)を刊行した。舞台は5000万年後。人類はとうに滅亡し，ネコ科だがサルのように手足でものをつかむ「ストライガー」や，水陸両棲の霊長類で水に入るとカエルそっくりに泳ぎまわる「スウイミング・モンキー」などが活躍している。当時4000円で購入した大判図鑑は，いまも私の愛蔵書である。でも『フューチャー・イズ・ワイルド』はさらにスケールが大きく，図版もリアルで楽しめる。いわば『アフターマン』の進化形なのだ。

2億年後の地球を見てみよう。まず数千年後，氷河期のピークがきて人類は絶滅。1億年後，今度は火山活動の活性化によってあらゆる生物は死にたえる。2億年後，大陸は移動し，1つになった超大陸(第2パンゲア)が生まれる。大陸が1つだから，それをとり囲む海も1つ(地球海)だ。

地球海上空を群れをなして舞っているのは「オーシャン・フリッシュ」である。本書カバーに描かれた魚のオバケのような生物で，カモメほどの大きさ。祖先はタラ科の魚だが，胸びれが翼に進化し，1秒間に8回はばたくという。

「海鳥から進化したクジラ並みの巨大ペンギン」「地下社会でコロニーを営むウズラの末裔」「4匹ひと組で鳥を襲う極彩色の甲虫」「4枚の羽で標高1万メートルを滑空するツルの子孫」……「へぇ～，へぇ～」と驚くうちに，本書の圧巻「メガスクイド」が出現する。重さ8トン，2億年後の地球をのし歩く最大の陸生動物。先祖は頭足類，つまりイカだというのである。骨はないかわりに筋繊維が発達し，8本足で移動する。イカの足は10本のはずだがと思いきや，残りの2本は「触腕」と化し，2メートル先まで伸びて果物，若葉，樹上に住む生物などをエサにする。額にあたる部分からは鳴き声を発する。「激しく雨が降るなか，メガスクイドはうなるような大きな声を出しながら，この一帯は自分のなわばりだと宣言してまわっているのである」(p.270)

このあたりでアホらしくなるひとがいるかもしれないが，著者たちは真剣だ。生物学，地質学，気候学，生態学など専門家からなる国際チームと連携し，可能なかぎり科学的正確さを期したという。

かつて『ワンダフル・ライフ』(ハヤカワ文庫)で，想像を絶するような形態の生物(カンブリア紀に実在し絶滅したバージェス動物)を紹介したS.J.グールドは，「専門家にも，興味をもった素人にも同じように読めて，しかもどちらをも満足させる科学書」を書きたいといっていた。『フューチャー・イズ・ワイルド』は，まさにそうした1冊だと思う。

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2004

2026/10/10 02:43:42